

佳作

ぼくの家のモコちゃん

兵庫県 姫路市立東小学校二年 衣笠 雅陽

ぼくの家には、十四さいのトイプードルのモコちゃんという犬がいます。モコちゃんはぼくが生まれる前からいるおじいさんくらいの年の犬です。ぼくが学校に行くときも帰ってきたときもワンワンとほえて、いつてらっしゃいやおかえりと言ってくれます。ぼくが楽しいときは、しっぽをふってよろこんでくれたり、ぼくがかなしいときには、じーっとぼくの顔を見てまるい大きな目がんばれというような顔をしてくれます。そんなぼくの大切な大切な家ぞくのやさしいモコちゃんです。

そんなモコちゃんも、びょう気になったことがありません。すこし前にへんななきごえでずっとないているので、お父さんがみてみると、立ち上がるこどができなくてくるしそうにしていました。家ぞくで、モコちゃんはいじょうぶ？と言っても、ずっと

ました。

モコちゃんが、前のようにケージの中でワンワンとなきながら立ってぼくにおかえりと言ってくれました。ぼくはびっくりしたけど、うれしくてないてしまいました。きっとぼくが学校に行っているときにいつも立ち上がるれんしゅうをしていたんだと思います。先生もむりだといっていたのにぼくはモコちゃんすごいと思いました。まい日まい日がんばったんだと思いました。今はすこしならジャンプもできるようになりました。ぼくはモコちゃんから大きながんばる力をもらいました。モコちゃんこれからもずっと家ぞくだよ。

くるしそうにないています。いつもとはぜんぜんちがうこえで、一かいても立ち上がれないのでいそいでどぶつびょういんにお父さんがつれていきました。すると、足のほねがはずれていてのばすこともできなくなっていて、すぐに入いんをしました。一回はよくなくて家に帰ってきたけど、また同じようになつて二回めの入いんをしました。そのときに先生は、「もうなおらないかもしれない、立ち上がることもできないかもしれない。」

といいました。ぼくは、あんなにいつも元気だったのになんてかな？とおもってかなしい気もちになりました。いたいのほましになったのでいえにかえってきました。それからケージの中ですわってくらしました。ぼくはモコちゃんが元気でいえにかえってきたんだからそれでいいと思っていました。でもあるあさ、そーっと足をふるわせながらゆっくりと立ち上がろうとしているモコちゃんを見ました。そつとすこしはなれたところで見ているとなんかいもゆっくりと立ち上がろうとがんばっていました。ぼくはうまく立てたらしいのになと思っていました。それから、ふつうにくらしていて、いつものように学校からかえってきたら、びっくりしたことがあります。